

『図解 社会経済学』第14刷までの訂正一覧

初刷りに第2刷～第14刷で加えた訂正箇所。誤記・誤植・文章の改善・必要な追加などのほかに、これらの訂正によるページの増加を抑えるための加筆も含む。なお、奥付の変更、第12刷で行なった、文意には影響のない多数の修辞上の手入れ、および、図を見やすくするために行なった若干の微調整は記載していない。

訂正を行なった刷

刷	初刷りのページ, 行	初刷り	第11刷までの訂正
6	カバー (左端および右端) および表紙の図		【労働市場での G と W とのあいだにある上方の線を G—W となるように下げる。】
6	Ⅲ ページ本文下から 6 行	日本語の	「経世済民」から来た日本語の
10	同ページ本文下から 4 行	前世紀	19 世紀
10	同ページ本文下から 3 行	「純粹に科学的」だと自負する自分の	マーシャル (Alfred Marshall, 1842-1924) などが自分たちの
10	同ページ本文下から 2 行	エコノミーから	エコノミーと
6	同ページ本文下から 1 行	称することが行なわれるようになって	称して
11	同ページ注下から 9 行	最近刊行された	【削除】
11	同ページ注下から 7 行	の邦訳	の, 1998 年に刊行された
10	Ⅳ ページ下から 7 行	社会全体についての	社会全体についての
10	同ページ下から 6～5 行	「だれでも知っているように、この世の中は疑問だらけ」ではけっしてないのである。	【削除】
14	Ⅴ ページ下から 5 行	明るい頂上	明るい頂上
14	同ページ下から 1 行	1998 年 (上製版, 全 5 冊) 【この上製版は絶版になった。】	1989 年 (新書版, 全 13 冊)

14	VI ページ 12 行以下	【挿入】	第 14 刷での追記 著者は 2009 年に、ヨハン・モスト原著／カール・マルクス加筆・改訂『マルクス自身の手による資本論入門』（大月書店）という訳書を刊行しました。この書物の原書は、モストという人が作成した『資本論』第 1 巻の入門書に、ある経緯から、『資本論』の著者自身が大幅に手を加えるだけでなく、部分的には大きく書き加えたりすることになった、類例のない貴重な作品です。内容は、本書『図解 社会経済学』の「第 1 篇 資本の生産過程」にあたります。多くの人びとにこの書物を読んでもらうように、訳文を「です、ます」調にするなど、わかりやすくするための工夫をこらしました。本書を読まれるさいに参考にしていただけるものですが、逆に、この『資本論入門』をお読みいただくときに本書の該当箇所での説明を参考にしていただくのもいいのではないかと思います。
4	VII ページ下から 6 行	ページをあげておいた。	ページをあげ、邦訳『全集』に収められていない『経済学批判要綱』からの引用には、『資本論草稿集』②（大月書店、1993 年）のページをあげておいた。
10	VIII ページ		【「本書で使われている記号」一覧を追加】
11	同ページ左欄下から 17 行	商品量	量
11	同ページ左欄下から 16 行	Wg	W _G
11	XI ページ上から 3 行	大工業は資本主義的生産の 変革と新社会の形成要素を 発展させる	大工業は社会変革の契機と新社会形成の要素 とを発展させる
10	XIX ページ上から 10 行	経済的事象	物象
9	同ページ上から 13 行	交換過程の媒介	交換過程の矛盾の媒介
14	XX ページ下から 16 行	1998 年	2013 年
9	XX ページ下から 2 行	機械の概念	発達した機械
9	XXII ページ下から 4 行	利潤も	利潤率も
6	6 ページ下から 2 行	1729-1790	1723-1790
6	14 ページ上から 10 行	本質は、	本質は、主体としての人間が客体としての
6	同ページ上から 12 行	実践を通じて目的を達成す ることによって	この活動によって
6	15 ページ図 10		【「生産関係」および「生産力」をゴシックにする。】
6	16 ページ上から 7 行目	生産の本源的費用	人間にとっての生産の本源的費用
6	17 ページ注 1)下から 4 行	必須労働と剰余労働	のちに§2 で述べる必須労働と剰余労働
14	19 ページ本文下から 8 行	総務庁	総務省

14	同ページ表 1	【新しい数字に変更】	表 1 労働力人口と非労働力人口 総人口 11,077 万人 「非労働力人口 4,473 万人……労働力をもっていない」 「労働力人口 6,598 万人……労働力をもっている」 「就業者 6,385 万人……労働している」 「完全失業者 204 万人……労働していない」 (総務省統計局『2015 年労働力調査年報』により作成。15 歳以上人口, 2015 年平均)
6	22 ページ下から 9-8 行	科学・技術の発展段階, 協業や分業のような生産過程での労働者の社会的結合の発展度, 機械,	協業や分業のような生産過程での労働者の社会的結合の発展度, 科学・技術の発展段階, 機械,
4	24 ページ図 22	km	Km 【小文字 k を大文字 K にする】
6	25 ページ図 23	再現生産手段の生産費用	再現生産手段の生産費用 (旧労働の量)
6	同	新生産物の生産費用	新生産物の生産費用 (新労働の量)
5	26 ページ上から 2 行	では,	では, しばらくのあいだは
6	同ページ上から 3 行	諸個人が自由に	諸個人が必須労働時間以外に自由に
6	同ページ上から 5 行	を超える労働時間部分	を超える部分
5	27 ページ上から 3 行	まず,	A) まず,
5	同ページ上から 11 行	さらに,	B) さらに,
10	30 ページ下から 8 行	社会化された	社会的な
5	32 ページ下から 10 行	事実上,	事実上, 土地にたいして
4	34 ページ上から 16 行	商品の交換	労働生産物の交換
10	35 ページ図 33	必要に応じての分配	欲求に応じての分配
14	同図	アソシエイト【2箇所】	アソーシエイト
14	同ページ下から 7 行	アソシエイト	アソーシエイト
4	39 ページ上から 11-12 行	それを	新生産関係を
12	40 ページ下から 2 行	資本主義生産様式	資本主義的生産様式
6	41 ページ下から 1 行	触れないでおく。	触れないでおく。弁証法に興味をもたれる方は, とりあえず, 84 ページの注 11 を参照されたい。
9	54 ページ下から 14 行	決めていた	決めてきた
10	56 ページ図 50 (2箇所)	L _i	L
6	65 ページ上から 1 行	【改行】	【改行しない。】
4	同ページ上から 2 行	交換価値	交換価値 (☞ 図 45)
6	同ページ上から 8 行	再び,	再び交換価値を,
6	同ページ上から 9 行	現象形態を	現象形態として
12	同ページ下から 5 行	毛布	毛皮
11	67 ページ上から 13 行	y 量の量の商品 B	y 量の商品 B
6	71 ページ下から 12 行	このような共同事業が行なわれないではないのはなぜか	なにがこのような共同事業が行なわれないではないようにするのか
4	同ページ下から 11 行	第 4 節	第 4 節§1
9	76 ページ図 75	人間的労働の同等性	労働の社会的性格
11	78 ページ下から 2 行	たがいに	【削除】
10	79 ページ図 77 タイトル	経済的事象	物象
9	同ページ下から 1 行	現れる	現われる

7	80 ページ下から 7 行	転変	転回
6	81 ページ下から 1 行	品生産とは生産過程が	品生産とは、人間が生産過程を支配しているのではなくて、その逆に生産過程が
4	83 ページ上から 10 行	単独な等価物	個別的等価物
12	85 ページ下から 2 行	商品が相互に	人々が商品を
6	88 ページ上から 5 行	どのようにして	どのようにして
4	88 ページ下から 4 行	共同である商品を	共同して、ある商品を
11	88 ページ下から 2-1 行	特定の商品を自分たちの仲間から	商品の世界から特定の商品を
9	89 ページ図 80 タイトル	交換過程の媒介	交換過程の矛盾の媒介
6	89 ページ図 80		【 $-\boxed{=E}$ の下の「価値の実現」が、 $-\boxed{=E}$ から E への矢印を指示するようにする。】
5	89 ページ図 80	② $\boxed{W_1}$ 価値としての実現	② $\boxed{W_1}$ の価値としての実現
12	91 ページ下から 11 行	S. 104	S. 104-105
1	93 ページ図 83	ある量の価格	ある量の価値
4	100 ページ上から 2 行	人間的労働	人間の労働
9	101 ページ上から 3 行	<small>ひょうりょう</small> 秤量 貨幣	<small>しょうりょう</small> 秤量 貨幣
4	102 ページ図 93	【5 円玉の摩滅分だけを次第に大きくしている。】	【5 円玉を、摩滅するに従って、小さくしていく。】
13	105 ページ下から 6 行	複雑である。	複雑である (図 96)。
14	106 ページ上から 4 行	のである。それによって	のである。つまり、将来の G を先取りしたのである。それによって
13	同ページ下から 7 行	である (図 96)。	である。
5	107 ページ図 96	買い手自身による象徴的な代理	買い手 (G の人格化) が G を象徴的に代理する
14	同上	買い手 (G の人格化) が G を象徴的に代理する	買い手 (G の人格化) が将来の G を象徴的に代理する
6	108 ページ上から 5 行	期日に B から	期日に A から
5	108 ページ上から 9 行	売買の連鎖を	売買の連鎖を、したがってまた信用の連鎖を
6	113 ページ下から 10-9 行	貨幣あるいは貨幣に類するもの	信用貨幣またはその支払を指図するもの
11	120 ページ上から 3-4 行	蓄蔵貨幣貯水池	蓄蔵貨幣貯水池
11	同ページ上から 5 行	蓄蔵貨幣貯水池	蓄蔵貨幣貯水池
11	123 ページ下から 10 行	だけ	【削除】
13	128 ページ下から 5 行	所有者が人格的に自由な (free) で	所有者は自由な (free) 人格で
10	129 ページ図 117	と表す。	と表わす。
2	同上	$\begin{array}{c} \uparrow \\ G \text{---} W \\ \downarrow \end{array}$	$\begin{array}{c} \downarrow \\ G \text{---} W \\ \uparrow \end{array}$
6	同上	$\begin{array}{c} W \text{---} G \\ \uparrow \quad \downarrow \end{array}$	$\begin{array}{c} W \text{---} G \\ \uparrow \quad \downarrow \end{array}$
11	124 ページ下から 12 行	インフレーション	インフレーション
4	130 ページ上から 11 行	決まった機械の総価値	機械の決まった総価値

13	同ページ下から 9-1 行	注 3) 【右のように変える。】	3) 賃貸しは、商品販売の一形態であり、利子を目的とする貸付ではない。賃貸し（商品の販売）にたいするレント（商品の代金）は、商品の総価値×（賃貸期間/耐久期間）によって決まる商品の価格であって、この貨幣額（価格）にたいする利子ではない。売り手が賃貸しする商品を生産または購買によって手に入れるさいに貨幣を借りて、のちに利子を支払うとしても、この利子は、レント（商品の価格）のなかから（正確に言えば、それが含む後述の「利潤」から）支払われるのであり、レントは利子率の高低とは無関係である。賃貸しを営むリース業は、利子率がゼロとなっても破産しない。むしろ、利子率が高くなれば、利子の支払が増加するのでリース行の利得はそれだけ減少する。このことから、レントが利子でないことがはっきりとわかる。																																												
14	132 ページ下から 4 行	たとえば『国民生活白書』のなかにあげられている 【『国民生活白書』は 2008 年版が最後になった。】	いわゆる																																												
11	133 ページ図 119 縦軸	30	25																																												
11	134 ページ図 121 縦軸	30	25																																												
14	137 ページ表 2	【新しい数字に変更】	<p>表 2 付加価値・賃金・労働分配率（2013 年）</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>付加価値 (100 万円)</th> <th>賃金 (100 万円)</th> <th>労働分配率 (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>4～9 人</td> <td>3,122,506</td> <td>1,511,145</td> <td>48.4</td> </tr> <tr> <td>10～19 人</td> <td>4,992,593</td> <td>2,285,273</td> <td>45.8</td> </tr> <tr> <td>20～29 人</td> <td>5,044,369</td> <td>2,096,750</td> <td>41.6</td> </tr> <tr> <td>30～49 人</td> <td>5,139,086</td> <td>2,234,574</td> <td>43.5</td> </tr> <tr> <td>50～99 人</td> <td>9,980,234</td> <td>3,863,122</td> <td>38.7</td> </tr> <tr> <td>100～199 人</td> <td>12,460,996</td> <td>4,353,965</td> <td>34.9</td> </tr> <tr> <td>200～299 人</td> <td>7,941,137</td> <td>2,594,237</td> <td>32.7</td> </tr> <tr> <td>300～499 人</td> <td>9,930,303</td> <td>3,171,625</td> <td>31.9</td> </tr> <tr> <td>500～999 人</td> <td>10,800,627</td> <td>3,708,436</td> <td>34.3</td> </tr> <tr> <td>1000 人以上</td> <td>20,737,034</td> <td>6,406,400</td> <td>30.9</td> </tr> </tbody> </table> <p>経済産業省『平成 25 年工業統計調査』（産業編）により作成。付加価値は「付加価値額」、賃金は現金給与総額、労働分配率は付加価値に対する賃金の割合。</p>		付加価値 (100 万円)	賃金 (100 万円)	労働分配率 (%)	4～9 人	3,122,506	1,511,145	48.4	10～19 人	4,992,593	2,285,273	45.8	20～29 人	5,044,369	2,096,750	41.6	30～49 人	5,139,086	2,234,574	43.5	50～99 人	9,980,234	3,863,122	38.7	100～199 人	12,460,996	4,353,965	34.9	200～299 人	7,941,137	2,594,237	32.7	300～499 人	9,930,303	3,171,625	31.9	500～999 人	10,800,627	3,708,436	34.3	1000 人以上	20,737,034	6,406,400	30.9
	付加価値 (100 万円)	賃金 (100 万円)	労働分配率 (%)																																												
4～9 人	3,122,506	1,511,145	48.4																																												
10～19 人	4,992,593	2,285,273	45.8																																												
20～29 人	5,044,369	2,096,750	41.6																																												
30～49 人	5,139,086	2,234,574	43.5																																												
50～99 人	9,980,234	3,863,122	38.7																																												
100～199 人	12,460,996	4,353,965	34.9																																												
200～299 人	7,941,137	2,594,237	32.7																																												
300～499 人	9,930,303	3,171,625	31.9																																												
500～999 人	10,800,627	3,708,436	34.3																																												
1000 人以上	20,737,034	6,406,400	30.9																																												
6	140 ページ図 128	労働力等価の再生産	労働力価値の等価の再生産																																												
11	同上	剰余価値の新生産	剰余価値の生産																																												
6	同上		【最下行の「不変資本」の下に「(旧価値)」, 「価値生産物」の下に「(新価値)」をつける。】																																												
11	140 ページ下から 9 行	労働力の日価値	労働力の価値																																												
6	141 ページ上から 6 行	可能なかぎり多くの剰余労働を	剰余労働ないし剰余生産物を																																												

10	同ページ上から 7 行	非労働者が直接生産者から、直接生産者の意志にかかわらず彼らを——人格的または物象的（経済的）に——強制して	直接生産者になんらか人格的または物象的（経済的）強制によって必須労働時間を超えて労働させ、彼らの
6	同ページ上から 13 行	可能なかぎりの剰余価値を	剰余価値を
6	同ページ上から 14 行	しようとする。	している。
6	142 ページ上から 2-5 行		【「支払労働」および「不払労働」という語を引用符（「」）で囲む。】
6	143 ページ図 129 【④の一番下の四角のなか】	v	m
11	同図【④の左に添えられた文字】	必要生産物	必須生産物
11	148 ページ図 131 縦軸	30	25
11	同	40	30
11	同	50	35
13	149 ページ上から 16 行	自分の人格	人間の身体
10	150 ページ図 132 【次のように修正する】		
	<p>図132 絶対的剰余価値の生産（労働日の延長による剰余価値の増大）</p> <p>図132 絶対的剰余価値の生産（労働日の延長による剰余価値の増大）</p> <p>必須労働時間(Ln)を超える労働時間の延長</p> <p>労働日の一層の延長</p> <p>絶対的剰余価値</p> <p>絶対的剰余価値の増大</p>		
10	同ページ下から 1 行	によって絶対的剰余価値が	によってさらに多くの絶対的剰余価値が
2	152 ページ上から 1~2 行	マルクス『資本論』	『資本論』
14	153 ページ下から 9 行	アソシエーション	アソシエーション（35-36 ページを参照、235-240 ページで詳述）
13	154 ページ下から 2 行	増大する。	増大する（☞図 27）。
6	155 ページ図 133	⇒可変資本の減少	*⇒可変資本の減少
6	同	労働力価値の減少⇒【2 箇所】	労働力価値の減少⇒*
11	同ページ下から 7 行	生産様式	生産方法

11	同ページ下から 6 行	図 27	図 52
11	同ページ下から 3 行	(☞図 52)	【削除】
9	156 ページ下から 1 行	欠損価値を	欠損価値だけ剰余価値を
5	158 ページ上から 1 行	社会的必要労働時間を短縮して剰余価値	必須労働時間を短縮して剰余労働時間
4	159 ページ上から 1-7 行		【1 行目の「(」を「⑤」に直し、以下の⑤～⑧をそれぞれ⑥～⑨に直す。】
11	159 ページ下から 11 行	資本の社会的生産力	資本の生産力
8	163 ページ図 137【タイトル】	機械の概念	発達した機械
11	165 ページ上から 12 行	しかも	しかも機械は
11	同ページ下から 8 行	機械生産	機械による生産
12	167 ページ下から 14 行	近代	現代の
12	同ページ下から 12 行	近代	現代の
11	168 ページ下から 9 行	労働力	労働力価値
5	170 ページ上から 2 行	大工業は資本主義的生産	諸矛盾の発展は資本主義的生産
5	171 ページ下から 13 行	教育	知育
2	173 ページ下から 2 行	マルクス『資本論』	『資本論』
6	175 ページ下から 8 行	労働力	商品としての労働力
6	同ページ下から 2 行	労働力	商品としての労働力
10	177 ページ上から 2 行	それらうえで	それらうえで
11	170 ページ上から 1 行	大工業は資本主義的生産の 変革と新社会の形成要素を 発展させる	大工業は社会変革の契機と新社会形成の要素 とを発展させる
11	同ページ上から 15 行	資本主義的大工業はこのよ うな消極面をもっている。	【削除】
11	172 ページ上から 9 行	機械と労働者との競争と敵 対とを	資本と労働者との敵対を
10	180 ページ上から 8 行	実体的包摂とな	実体的包摂と
6	182 ページ上から 11 行	継承する	継承する ¹⁾

6	同ページ下部		【次の脚注を挿入する。】 1) マルクスは、彼の初期の労作『1844年の経済学・哲学手稿』のなかで、「ヘーゲルの『現象学』とそれの最終成果における偉大なもの——動かし産み出す原理としての否定性である弁証法における偉大なもの——の一つは、ヘーゲルが、人間が自分を産出することを一つの過程としてつかんでいること、対象化を脱対象化として、外在化として、そしてこの外在化の廃棄としてつかんでいること、だから、彼が労働の本質をつかんでいること、対象的な人間を、現実的であるがゆえに真なる人間を、人間自身の労働の成果として概念的に把握していることである」(MEW, Bd.40, S.574), と言っている。
5	183 ページ上から 2 行	止場	止揚
6	184 ページ図 140	❖..... (貨幣表現で 1000 円)	❖..... (貨幣表現で 2000 円)
6	同上	5 千円【5 箇所】	一万円
6	同上	労働力の価値	労働力の日価値
6	同上		【N の ↓ と A の ↓ とを = で繋ぐ。】
6	185 ページ図 141	5 千円【3 箇所】	一万円
6	同上	労働の価格	日労働の価格
11	187 ページ上から 5 行	労働日の日価値	労働力の日価値
7	189 ページ上から 6 行	売った	売っている
5	同ページ下から 4-1 行	それなら.....になる。	【削除】
5	190 ページ上から 1-4 行	(3) そもそも.....である。	【削除】
6	191 ページ下から 3 行	正常に	正常に (つまり支障なく)
9	193 ページ図 144	√【2 箇所】	√【大文字を小文字にする】
11	194 ページ上から 8 行	個別労働者	彼が雇う労働者
5	同ページ下から 3 行	必要労働	必須労働
11	195 ページ上から 4 行	労働者と資本家との取引は等価交換に見える	市場での資本家と労働者との取引は等価交換である
11	同ページ上から 4 行	ここでは	労働市場では
11	同ページ図 145 タイトル	資本家階級と労働者階級	資本家と労働者
11	同図	資本家階級【2 箇所】	資本家
11	同図	労働者階級【2 箇所】	労働者
11	198 ページ上から 7 行	取得の賜物	取得と消費の賜物
11	同ページ上から 10 行	取得したから	取得し、消費した
11	同ページ上から 11 行	こそ、1000 の価値を消費しながら、なお 1000 の価値をもっているのだ	【削除】
11	同ページ上から 13 行	取得の賜物	取得と消費の賜物

11	同ページ同行	取得した剰余価値	取得し、消費し尽くした剰余価値
11	同ページ下から 10 行	取得してきた	取得し、消費してきた
11	199 ページ上から 4 行	取得しなければ	取得し続けなければ
12	同ページ下から 10 行	前節	第 1 節
13	206 ページ図 151	【図の表題】転回する	転回する（小数点以下は四捨五入）
11	209 ページ上から 11-12 行	一方に資本家、他方に賃労働者	一方に有産者、他方に無産者
11	210 ページ下から 1 行	前者の構成は、後者の構成	資本の価値構成は、資本の技術的構成
13	210 ページ 10-14 行	資本は、投下される資本の価値またはその貨幣表現である価格の面から見れば、不変資本と可変資本とから構成されるが、不変資本の大きさは充用される生産手段の価値または価格によって、可変資本の大きさは充用される労働力の価値または価格すなわち労賃総額によって規定される。この面から見た構成を 資本の価値構成 と呼ぶ。	資本は、投下される資本の価値から見れば、不変資本と可変資本とから構成されるが、不変資本の大きさは充用される生産手段の価値によって、また可変資本の大きさは充用される労働力の価値によって、それぞれ規定される。この面から見た資本の構成を 資本の価値構成 と呼ぶ。
13	211 ページ上から 3-5 行	資本主義的生産の発展のなかで生じる資本の価値構成の変化のうち、決定的に重要であるのは、資本の技術的構成の変化を反映した変化である	【傍点をつける】資本主義的生産の発展のなかで生じる資本の価値構成の変化のうち、決定的に重要であるのは、資本の技術的構成の変化を反映した変化である
7	211 ページ下から 8 行	または	あるいは
5	212 ページ上から 6 行	この過程は産業循環の「中休み期間」	この「中休み期間」は産業資本のうちの一時期
12	同ページ同行	「中休み期間」	中休み期間
11	同ページ上から 12 行	価格の上昇	商品価格の上昇
5	同ページ下から 1 行-213 ページ上から 1 行	独立変数を賃金にとり	賃金を独立変数とし
5	213 ページ上から 6 行	状態によって、労働力	状態によって労働力
11	215 ページ上から 8 行	それを減少させるだけでなく、	【削除】
5	216 ページ上から 2-3 行	労働需要は、	労働力需要の増大は、
11	同ページ本文下から 4 行	労働需要	労働力需要
11	同ページ本文下から 3-4 行	および資本	および固定資本
12	218 ページ下から 19 行	理由でが	理由で
10	220 ページ下から 6 行	比例して	反比例して
11	223 ページ下から 9 行	農奴制	隷農制
6	224 ページ図 162 【「独立自営農民」の上】	保有	所有
7	同上	農奴・隷農	農奴→隷農

13	同上		【右端にある上下2つの「←自由・対等・平等→」を削る】
11	同上	農奴制廃止	隷農制廃止
6	227 ページ図 165		【右上の空白部に挿入する。】 正確に言えば、労働者から買った労働力の消費によって、剰余価値を含む生産物を取得したとき、有産者ははじめて資本家になる。
12	230 ページ下から 11 行	ネーデルランドの離脱	オランダの独立
12	同ページ下から 11-10 行	イギリスの反ジャコバン	ナポレオン
14	233 ページ下から 7 行	アソシエイト	アソーシエイト
14	234 ページ図 166	アソシエイトした諸個人	アソーシエイトした諸個人
12	同ページ下から 9 行	社会的所有	アソシエイトした諸個人の所有
14	同ページ下から 9, 6 行	アソシエイト	アソーシエイト
14	236 ページ 4, 5, 6 行	アソシエイト	アソーシエイト
14	同ページ脚注 1) 下から 9, 8 行	アソシエイト	アソーシエイト
14	237 ページ下から 17, 15, 7 行	アソシエイト	アソーシエイト
14	237 ページ 2, 3-4, 7 行	アソシエイト	アソーシエイト
14	同ページ下から 10, 4, 2 行	アソシエイト	アソーシエイト
14	238 ページ 6, 9-10 行	アソシエイト	アソーシエイト
13	236 ページ上から 5-6 行	あるいは「アソシエイトした生産様式」	【削除】
11	236 ページ上から 9 行	社会化された	社会化した
12	同ページ下から 13 行	文献	拙著
12	同ページ下から 11-12 行	「社会主義とはどのような社会か」、『経済志林』第 63 巻第 3 号, 1995 年 12 月。	『マルクスのアソシエーション論』桜井書店, 2011 年。同書は、旧ソ連の社会をどう見るか、ということについても詳述している。
13	238 ページ上から 3 行	社会化された人間	社会化した人間
12	239 ページ上から 15 行	分配原則	原則
12	同ページ上から 16 行	分配原則	原則
12	240 ページ下から 13 行	助産婦または助産士	助産師
7	247 ページ下から 4 行	重農学派の経済学者, 古典派の経済学者	古典派の経済学者, 重農学派の経済学者
7	249 ページ下から 8 行	生産資本の循環は	生産資本の循環は再生産を表わすのだから、この循環は
7	250 ページ上から 2 行	表現している	表現する
10	同ページ上から 14 行	資本の労働者の $w(A)-g-w$	資本に労働力 (A) を売って必須生活手段を買う労働者の $W(A)-G-W(N)$
7	同ページ下から 5 行	流通過程で	流通過程を経たのち、生産過程の出発点で
5	251 ページ上から 11 行, 12 行	生産資本	商品資本
7	253 ページ図 171	$W'—W'$	$W'—W'$
7	同上	$G'—G'$	$G'—G'$
7	同上	$W'—W'$	$W'—W'$

7	254 ページ 5 行	変態ではなくて、資本（資本価値）の変態である	変態であると同時に、資本（資本価値）の変態でもある
7	259 ページ 8 行	回転時間	回転時間 〔ゴシック体にする〕
5	262 ページ下から 4 行	1 循環.....この循環	1 回転.....この回転
10	265 ページ図 179	Ⓚm 【2 箇所】	Ⓚm 【小文字 k を大文字 K にする】
7	266 ページ上から 3 行	拡大のために	拡大のための
11	同ページ図 181	A 以外の入口 【2 箇所】	A 以外の人口
12	267 ページ上から 14-15 行	「社会的総資本の再生産と流通」あるいは「社会的総資本の再生産の実体的諸条件」	互いに絡み合った無数の個別資本からなる「社会的総資本の再生産と流通」

【「[再生産表式の内容の
図解]」の部分をも
右のもの
に置き換える】

【再生産表式の内容の図解】 すでに見たように (251 ページ), 商品資本の循環は次のように進行する。まず, 商品資本 W' のうち資本価値 $W (=c+v)$ が, 変態 $W-G-W$ を経て生産資本 P に転換され, 剰余価値 w が, 変態 $w-g-w$ を経て資本家の消費ファンド w に転換され, 続いて, 生産資本 P が生産過程で生産物 = 商品資本 $W'(W+w)$ を生産し, 資本家による消費ファンド w の消費によって資本家が再生産される。こうして循環が完了する。

商品資本の循環の進行は, 社会的総商品資本の場合でも同じである。二つの部門の商品資本 W' が, それぞれ変態 $W-G-W$ および変態 $w-g-w$ を経て, それぞれの部門の生産資本 P および資本家の消費ファンド w に転換されたのち, P による生産過程と資本家による w の個人的消費過程とによって, それぞれの部門の W' と資本家とが再生産される。

しかし社会的総資本の再生産は, それぞれの部門での, 資本の変態 $W-G-W$, 剰余価値の変態 $w-g-w$, そして労働者のもとの労働力商品の変態 $W(A)-G-W$ が, たがいに絡み合うことによって行なわれる。そこで, この三つの変態がどのように絡み合うのか, ということが問題になる。

生産過程はそれぞれの部門の内部で進行する過程なのだから, もろもろの変態の絡み合いをつかむには流通過程を観察する必要がある。流通過程での絡み合いはすべて商品の売買によって仲立ちされる。図 183 を見よう。この図では矢印付きの太い線で商品の運動を示している。貨幣は, この線を, 矢印の向きとは反対の方向に, つまり矢印の先からこの線の出発点に向かって運動することになる。このようにこの線は貨幣の運動をも表わしているのである。

まず, この図を大づかみに見ると, 社会的総商品資本の諸要素がたがいに絡み合いながら運動することによって, (1) 第 I 部門のなかでの内部補填, (2) 第 II 部門のなかでの内部補填, (3) 第 I 部門と第 II 部門とのあいだでの相互補填, という三つの補填が行なわれることがわかるだろう。そこで, 商品および貨幣の運動によって実現される諸要素の転態を, 丸付数字の順に見ていこう。

① 第 I 部門の不変資本の転態: 資本家 I (第 I 部門の資本家たち) が, それぞれ違った生産手段の形態にある商品資本 IW' のうちの $4000c$ をたがいのあいだで売買し合って, 生産資本 IP のうちの $4000c$ を, 必要な生産手段の形態でそれぞれ補填する。これによって商品資本 $4000c$ は生産資本 $4000c$ に転態する。この転態に必要な貨幣は, 資本家 I のうちのだれかが前貸しなければならないが, この貨幣は, 転態を仲立ちしたあと, 前貸した資本家の手に還流する。

② 第 II 部門の不変資本の転態: 資本家 II (第 II 部門の資本家たち) が手持ちの貨幣 2000 で資本家 I から生産手段の形態にある商品資本 IW' のうちの生産手段 2000 を買う。これによって, II の不変資本 $2000c$ は生産資本 $2000c$ に転態し, I の商品資本 $1000v+1000m$ は貨幣 2000 に転態する。

③ 第 I 部門の資本家の収入の転態: 資本家 I は, この貨幣のうちの剰余価値 $1000m$ で資本家 II から消費手段 1000 を買って, これを個人的に消費し, 資本の人格化としての自己を再生産する。これは資本家 I による収入 1000 の支出である。これによって, II の商品資本 $2000c$ のうちの $1000c$ が貨幣資本 $1000c$ に転態し, 資本家 II によって前貸された貨幣 2000 のうちの 1000 が, <資本家 II → 資本家 I → 資本家 II> という経路を経て, 資本家 II の手に還流する。

④ 第 II 部門の資本家の収入の転態: 資本家 II が, 商品資本 W' のうちの $500m$ をたがいのあいだで売買し合って消費手段に転化し, これを個人的に消費して, 資本の人格化としての自己を再生産する。これによって, 商品資本 $500m$ は, まず貨幣 500 に転化し, 続いて資本家の消費ファンド $500m$ に転化する。貨幣 500 の消費ファンド $500m$ への転化は, 資本家 II による収入 500 の支出である。ここでは, 資本家 II のうちのだれかによって前貸された貨幣 500 が, この転態を仲立ちしたのちに, 前貸した資本家の手に還流する。

⑤ 第 I 部門の可変資本の転態: 資本家 I が, さきの②によって貨幣資本に

図183 再生産表式の意味

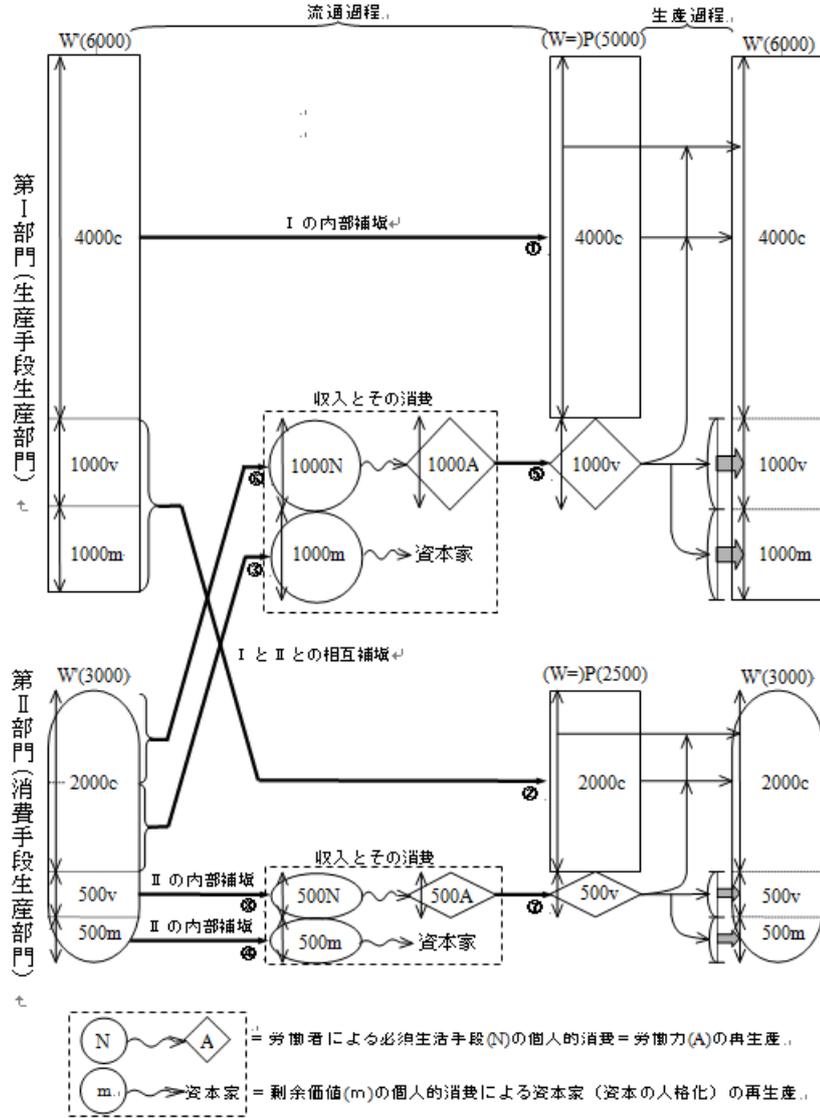
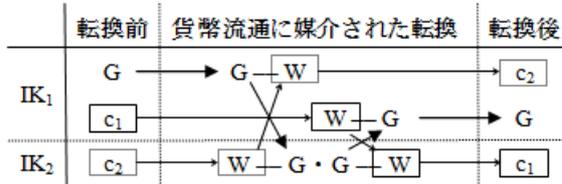


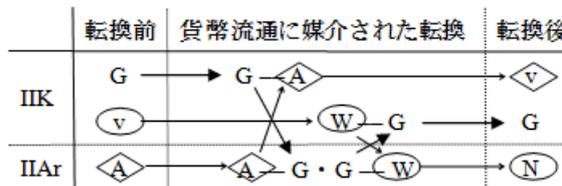
図 187 貨幣流通による社会的再生産の諸転換の媒介

(1) 第 I 部門の内部補填

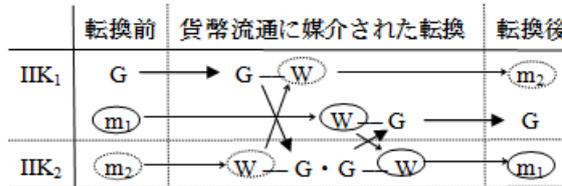


(2) 第 II 部門の内部補填

㊸ IIv の補填

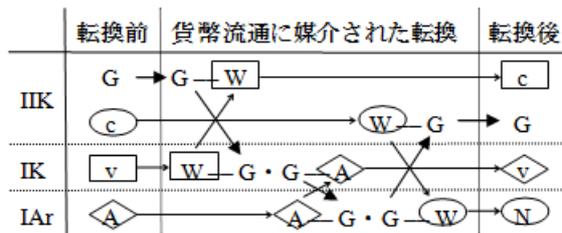


㊹ II_m の補填

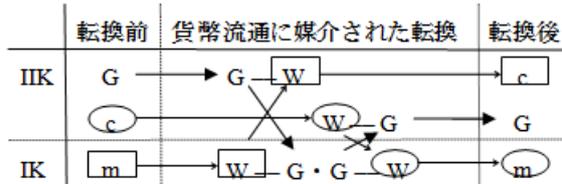


(3) 両部門間の相互補填

㊸ IIc と Iv との相互補填



㊹ IIc と Im との相互補填



11	同ページ下から 4-3 行	蓄蔵貨幣または	【削除】
7	同ページ下から 3 行	鑄貨準備として	鑄貨準備を
7	276 ページ上から 9 行	なっている	なっている (☞ 図 58 および図 128)

11	同ページ下から 2 行	第 II 部門では	第 II 部門の内部では
12	同ページ下から 2-1 行	収入と	収入を表わす貨幣と
12	277 ページ下から 7-5 行目	資本と収入とが交換される, すなわち前者の収入が後者の資本を補填し, 後者の資本が前者の収入となる, という事実, そして③第 I 部門内部での資本と資本との交換	前者の収入を表わす生産物が後者の資本を補填し, 後者の資本を表わす生産物が前者の収入によって買われる, という事実, そして, ③第 I 部門内部での相互補填は,
12	280 ページ図 189 (6 箇所)	償却基金	償却ファンド
11	281 ページ上から 15 行	との転換	とのあいだでの転換
6	282 ページ図 190		【図の右下の空白部に挿入する。】 mg は剰余価値 (m) のうちから金 (gold) の形態で貨幣補填分にあてられる部分を表わす。
10	284 ページ上から 5~6 行	仮設にすぎないこと, 貨幣による媒介はひとまず度外視していること	仮設であること, 商品とは逆方向に進むことによって転換を媒介する貨幣の運動は明示していないこと
12	同ページ上から 9-10 行	7500 が第 I 部門に 5500 が, 第 II 部門に 2000 が	7500 のうちの 5500 が第 I 部門に, 2000 が第 II 部門に
10	同ページ下から 2~1 行	これまでのところ, 拡大再生産を媒介する貨幣の運動を度外視してきた	これまでのところでは, 拡大再生産を媒介する貨幣の運動を明示していなかった
11	285 ページ図 194 第 3 年度 W' 2 行	=2906	=2904
7	286 ページ上から 10 行	蓄積ファンド	蓄積ファンド (蓄積基金)
12	287-8 ページ図 195 (10 箇所)	蓄積基金	蓄積ファンド
6	287 ページ図 195 (1)①	【IK ₁ の】 m	ma
9	同上	【IK ₁ の】 W	\overline{W}
6	同上 (1)②	【IK ₁ の】 c	mc
9	同上	【IK ₁ の】 \overline{W}	\overline{A}
6	同上	【IK ₁ の】 v	mv
6	同上		【IAr の A の前に挿入する。】追加労働力
9	同上	【IAr の】 \overline{W}	\overline{A}
6	同上 (1)③	【IK ₂ の】 mc	ma
6	同上 (1)④	【IK ₁ の】 A	mv
6	同上		【IAr の A の前に挿入する。】追加労働力
6	同上	【IK ₂ の】 m	ma
6	288 ページ図 195 (2)①	【IK ₂ の】 mc	ma
6	同上 (2)②	【IK ₁ の】 A	mv
6	同上		【IAr の A の前に挿入する。】追加労働力
6	同上	【IAr の「転換後」】 W	N
6	同上	【IK ₂ の】 mv	ma
12	288 ページ下から 6 行	二つの重要な問題点	二つの問題点

12	同ページ下から 4 行	独自の重要な問題点	独自の問題点
12	289 ページ上から 1 行	ために、蓄積のさいの貨幣投下には独自の複雑な問題が付け加わるの	ことが蓄積のさいの貨幣投下に独自の困難を引き起こすのか、という問題
6	291 ページ図 200	+ 6600	= 6600
6	同上	+ 2400	= 2400
9	304 ページ上から 2 行	$p' = \frac{m}{c}$	$p' = \frac{m}{C}$
11	【6刷-10刷】304 ページ上から 8 行	(つまり資本の有機的構成の逆数)	【削除】
6	312 ページ上から 1 行	現わる	現われる
12	同ページ下から 2 行	価値とし	価値として
10	314 ページ図 204	欠損価値	欠損利潤
9	315 ページ図 207 タイトル	利潤も	利潤率も
13	317 ページ下から 10 行	「費用価格」と呼んだ。マルクスはこれをリカードウにならって「生産価格」と呼んだ。	「生産費用」と呼んだ。マルクスはこれを「生産価格」と呼んだ。
11	318 ページ上から 11 行	これで、	これで
11	318 ページ上から 12 行	こちらは商品の価値とは直接にはなんの関係もない	商品の価値とは直接にはなんの関係もない
11	320 ページ表 4	4. ... 52.5	4. ... 82.5
11	同	7. ... 1305	7. ... 13.5
12	同	11. 社会的総価値 (= $\Sigma 10$)	11. 社会的総価値 ($\Sigma 10$)
12	同	12. 社会的需要総額 ($\Sigma 11$)	12. 社会的需要総額 (= $\Sigma 11$)
12	同	15. 社会的総価格 (= $\Sigma 14$)	15. 社会的総価格 ($\Sigma 14$)
6	同	20.....15.7%	20.....-15.7%
12	321 ページ表 5	26. 社会的総実現利潤 ($\Sigma 22$)	26. 社会的総実現利潤 ($\Sigma 25$)
12	同ページ下から 21 行	どこも	どこでも
11	324 ページ上から 11 行	共産主義	共産主義だ
6	同ページ上から 12 行	皮肉っている	皮肉っている (エンゲルス宛てのマルクスの手紙, 1868 年 4 月 30 日)
6	328 ページ上から 15 行	と言った	と言った (『経済学批判要綱』, 邦訳『資本論草稿集』②, 557 ページ)
6	336 ページ図 212	商人 ...W→W 生産者	商人 ...W←W 生産者【矢印の向きを逆にする。】
12	344 ページ上から 15-16 行	であって、広義の商業資本に属する。	だから、広義の商業資本に属する。前節で見た商業資本 (狭義の商業資本) は、貨幣取扱資本と区別するときには商品取扱資本と呼ばれる。
13	346 ページ下から 7 行	銀行業務となる	銀行業務になる
10	354 ページ下から 8 行	NEW	MEW
6	358 ページ図 220		【「支払手段準備金」とその下の点線を削除する。】
6	359 ページ図 221		【「支払手段準備金」とその下の点線を削除する。】

6	360 ページ図 222		【「支払手段準備金」とその下の点線を削除する。】
5	361 ページ下から 14 行	銀行業者を貨幣	銀行業者を単純な貨幣
12	368 ページ上から 8 行	これまでのところ	長いあいだ
12	同	ゼロである	ゼロであった
12	同ページ上から 9 行	である。	である。近年は、貨幣取扱業務について手数料を徴収することが一般的となってきた。
10	同ページ下から 11 行	するので、このような観点から見ると当座性の	するよう見えるので、当座性の
12	同	ように見えるので	ので
10	同ページ下から 10 行	とになる。	とがある。
8	369 ページ上から 4 行	自己にたいする	無準備の
8	369 ページ上から 5-10 行	銀行が現金（金属貨幣または政府紙幣、また市中銀行にとっては中央銀行券も現金である）で信用を与える（現金を貸し付ける）場合でさえも、その現金が預金として受け入れたものであれば、この貸出によってその金額だけ支払準備が減少し、それだけの無準備の債務が生じるのであるから、この場合にも、銀行はそれだけの額の自己にたいする信用を創造するのであり、これによって自己の信用を与える	銀行が、預金として受け入れた現金のうち一部分を支払準備として手もとに残して他の部分を現金で貸し付ける（つまり信用を与える）とき、この貸出によって自己の預金債務のうちそれだけの額が無準備となるのだから、この場合にも、銀行はそれだけの額の無準備の信用（受ける信用）を創造するのであって、その結果、この新たに創造した無準備の受ける信用で自己の信用を与えていることになる
2	374 ページ下から 10 行	商品取引資本	商品取扱資本
11	382 ページ上から 11 行	平均利潤を	平均利潤と絶対地代とを
11	同ページ下から 9 行	絶対利潤	絶対地代
6	385 ページ上から 5 行	独占地代が	地代が
6	同ページ上から 6 行	偶然的ないし外的な	偶然的・外的な
6	同	購買欲	欲求
6	同ページ上から 8 行	ありうる。	ありうる（『資本論』第 3 部, MEW, Bd.25, S.772, 783)
6	同ページ上から 10 行	取得することができる。	取得できる。
11	386 ページ上から 7 行	あるが、	あるが、優等な生産条件は
11	【10 刷】387 ページ図 229	欠損利潤	欠損価値
11	390 ページ注下から 4 行	絶対地代に転化する	差額地代に転化する
11	392 ページ下から 9 行	私的土地所有形態の	私的土地所有の
12	394 ページ上から 7 行	ろうか。	ろうか。そうではない。
12	同ページ上から 8 行	である] そうではない。	である]
11	399 ページ図 230 最終行	=非労働力	=労働しない諸個人
8	403 ページ上から 5 行	正しくと捉える	正しく捉える
14	408 ページ上から 2-3 行	アソシエイト	アソーシエイト

4	同ページ脚注2)	<p>【次のように訂正・加筆する。】</p> <p>2) 「労働する個人」という語は『資本論』では一文（『資本論』, MEW, Bd. 23, S. 185）のなかで使われているほか、「労働個人」という語が一箇所に見られるだけである（同前, S. 790）。しかし、マルクスにとって社会のなかの人間がなにをおいても「労働する個人」であったことは、彼の著作の多くの箇所から明確に読み取ることができる。以下の文章を熟読玩味されたい（強調は引用者）。</p> <p>①「われわれが出発点としてとる前提は、現実的な諸個人、彼らの行動、および彼らの物質的生活諸条件である。特定の仕方で生産的に働いている特定の諸個人は、ある特定の社会的および政治的関係を結ぶ。ここで諸個人と言うのは、はたらき、物質的に生産している諸個人のこと、したがって特定の物質的な、彼らの意志からは独立な諸制限、諸前提および諸条件のもとで活動している諸個人のことである。」（『ドイツ・イデオロギー』, MEW, Bd. 3, S. 20, 25.）</p> <p>②「出発点はもちろん、社会のなかで生産している諸個人、それゆえ諸個人の社会的に規定された生産である。」（『経済学批判序説』, MEW, Bd. 13, S. 615）。</p> <p>③「資本の定式では、生きた労働は、原料にたいしても用具にたいしても、また労働が行なわれているあいだに必要とされる生活手段にたいしても、否定的なものにたいする仕方で、非所有にたいするしかたでかかわるのであって、この定式にはなによりもまず非土地所有が含まれている。言い換えれば、労働する諸個人が土地、大地にたいして自分自身の土地、大地にたいするしかたでかかわる状態、すなわち、土地の所有者として労働、生産している状態が否定されているのである。最善の場合には労働する個人は、土地にたいして労働者としてかかわるだけでなく、労働する主体としての自分自身にたいして土地の所有者としてかかわるのである。」（『経済学批判要綱』, 邦訳『資本論草稿集』②, 153-154 ページ。）</p> <p>④「資本の制限とは、……生産諸力、一般的富等々、知識等々をつくりだすことが、労働する個人自身が自分を外在化させるというかた</p>
---	----------	--

			ちで、すなわち彼が、自分のなかからつくりだすものにたいして、自分自身の富の諸条件にたいする仕方ではなく、他人の富の諸条件、自分自身の貧困の諸条件にたいする仕方にかかわる、というかたちで現われる、ということなのである。」（同前，邦訳，218 ページ。）
3	409 ページ上から 8 行	現わない	現われない
12	410 ページ上から 1 行	本講	本書
13	415 ページ上から 3 行	故松田智雄先生	松田智雄先生
13	同ページ上から 7 行	故三宅義夫先生	三宅義夫先生
13	同ページ上から 12 行	故見田石介先生	見田石介先生
2	415 ページ上から 17 行	久留間鮫造先生	故久留間鮫造先生
13	同ページ上から 17 行	故久留間鮫造先生	久留間鮫造先生【初刷りに戻す】
2	巻末折込み 1 (図 35)	❖ アジア的生産様式	❖ アジア的奴隷制
2	巻末折込み 2 (図 41)		【企業で生産された生産物の囲みを八角形にする。】
6	同上	❖ 企業利益および新規投資は度外視する	❖ 結果的に企業利益および新規投資は度外視されることになる
2	巻末折込み 3 (図 127)		【労働市場での G と W とのあいだにある上方の線を G—W となるように下げる。】
10	同【下方の説明の (II)】	[労働力の売買]	[労働力の購買]
6	同【下方の説明の (IV)】労働させる。この労働力消費の過程は.....労働させる。【改行】この労働力消費の過程は.....
11	同【下方の説明の (IV) の②の㊸】	剰余価値の新生産	剰余価値の生産
11	同	剰余価値を新たに生産する	剰余価値を生産する
11	巻末折込み 4 (図 201)	C【6箇所】	【削除】
11	同	W【6箇所】	【削除】
11	巻末折込み 5 (図 233)【流通部門・サービス部門】	150c	削除